

---

# たぶ友好会～拓也と哲哉のクリスマス

夏のサンタクロース

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たぶ友好会と拓也と哲哉のクリスマス

### 【Nコード】

N3001D

### 【作者名】

夏のサンタクロース

### 【あらすじ】

クリスマス。たぶ友好会でもパーティが開かれる。その日は拓也と、弟、哲哉にとって幸せな日となる。

## （前書き）

注意・小学生以下の方には本作品を読むことはお勧めしません。と  
いうより読まないでください。

クリスマス、それはひとつの祝いの日。

親友達と交流をふかめ合う日。

家族でチキンやケーキを食べる日。

恋人達にとっても…とても大切な日。

そして、何より、

子供達の夢が叶う日。

その日、たゞ友好会のメンバーも朝から光治の家で集まることになっていた。

拓也は目覚める。

目覚めると、もう、10時だった。約束の時間より、1時間もオーバーしている。

チッ、またあのアホになんか言われるのか

拓也は溜息をついた。そして、急いで出掛ける仕度したくをする。

飯はシヨクパン一枚ですませる。

ぬるものなど、この家にはない。それどころか、バターやジャムをぬるものさえない。

拓也は一年前に、父親を亡くしていた。拓也の父親は警察官で、休日、銀行に行ったところ、たまたま銀行強盗と鉢合わせした。説得し、止めようとしたが、犯人は言うことを聞かず、それどころか…。

拓也はそんな父親を尊敬など、しない。

自分の能力以上のことに手を出して、母さんを一人にした、最低の男だ。

とさえ思っている。

だから、拓也は（拓也いわく）あのアホのような奴は嫌いだ。

拓也は仏壇に向かう。そして手を合わせ、いつものように父親に話しかける。これは正義の為に最期まで戦った父親へのせめてもの礼儀だ。

『父さん、俺はあのアホをあんたのようににはさせない。明との約束もある。』

そして、思いつめるかのように同じ格好をして、しばらくすると、『行ってくるっ。』

と言って、玄関まで来た。その時、

『兄ちゃん。』

と後ろから声がした。

『哲哉！』

哲哉は拓也の弟だ。先月、六歳になった。父親が亡くなったとは、もちろん言っていない。

『サンタさん、今日、来るよね？』

拓也はうろたえながらも、

『あ、ああ。哲哉は何を頼むんだ？』

と聞いた。実際、金銭的に苦しい中、哲哉へのプレゼントを買うのは非常にまずい。だが、そこを理解しながらも拓也はあえて聞く。ところが、意外な反応が帰って来た。

『じゃあ、サンタさんに仕事で忙しいお父さんが帰ってくるようにお願いする。』

『！？っ。』

意外も意外。金銭で解決できるものと思っていたのだが…。何しろ、サンタさんの願いは絶対だ。しかも悪い子ならともかく、哲哉のようない子の言うことをきかないわけにはいかない。と拓也は思う。一応、

『わかった。』

と言って、家を出た。

出る間際に弟の、

『きつとだよ。』

と言う声が聞こえた。

拓也は光治の家の向かいながらも後悔した。

俺としたことが……。回避手段は他にもっとあったはず……。

そして、光治の家に着いた。

中に入ると、早くも部活のメンバーがパーティーの準備をしていた。始めに舞が

『拓也にしては珍しいわね。』

次に光治が

『おっせーよ、アホ。』

アホはお前だ。

と思いながらも、遅れた自分が悪いのでそこは黙る。

次に明が

『すごいでしょ、部の予算を使って盛大にやろうってことなんだ。』

確かに、真ん中には見たこともないようなでかいケーキ、さらにリボンが巻かれたチキンが人数分ある。上を見ると、紙飾りで飾ってあり、横を見ると、クリスマス用の木がある。大きさは、まあ、2メートル、あるかないか、ってところか。

次に光明が

『あ、その木の飾りつけは拓也君の役割だよ。僕も後から手伝うからね。』

と、ケーキの飾りつけをしている。

最後に広梳が、

『よう、お疲れ。』

何がだ？

と思ったが、まあいいとしよう。

と、準々に言った。

拓也は思っていた。

哲哉を悲しませるわけにはいかない

そこで、飾りつけも終わり、後はただ食べるだけ、って時になってストップをかけた。

『待つてくれ!!』

皆が拓也の方を見る。光治の手はケーキにフォークを突き刺す寸前で止まっていた。

危ない、危ない、アホにも人の話を聞く耳あったか、と思いながらも、こう切り出す。

『クリスマスなんだし、夜に食わないか?』

確かに、と一度は皆、納得するが、その後、光治が、

『でも、チキンとかは買いたてが1番だぜ。』

と、言い、それでも皆、納得する。

光治はさらに付け足す。

『それに夜はそれぞれ楽しみたいんじゃないか?って言ったのはお前じゃないか。』

グッ、精神的ダメージ100ってどこか。某会社のあるゲームなら一発で即死だ。

『だがっ!』

拓也は譲らない。

ここで、広梳が

『何か、あるのか?』

と気付いた。

拓也はやりわり話していくつもりだったが、仕方なく、全て話した。

『えっ、拓也君に弟が!?しかもお父さんに会いたって。』  
舞が驚いていた。

『そういうことなら。』

明と広梳は笑って、任せろのサインをとっていた。

光明は

『僕にも手伝わせて。』

と言っていた。

光治は含みのある声で

『どっしよっかな〜。』

と言っので、

このアホがつ。やはりこいつにだけは言わきゃよかったか  
と思ったが、

『うそだよ。そんなかわいい弟の願いを裏切ったら、バチが当たら  
あ。俺も手伝わせてもらうよ。』

と言つので、

こいつにもいいところが…。  
と、思い直した。

そして、パーティーが一転作戦会議に。

『この俺の分の豪華なチキンやケーキ、シャンパンは哲哉にやつて  
くれ。』

拓也は、そう申し出たが、舞に却下された。

『ダメよ、せっかく皆で祝うのだから。』

『でも金は…。』

拓也は顔を暗くした。

『そんなのどーとでもなるわよ。』

拓也は舞に心から感謝した。

そして、夜の8時頃、哲哉を呼んでの会食となった。皆今までの話  
で盛り上がった。光治をたぶ友好会に入れるのに明が苦労したこと、  
広梳が連続殺人犯人の一味だったこと、光明の中にいる宇宙人のこ  
と、拓也にとつては驚きの連続で、哲哉も豪華な食事と面白おかし  
く語られる話を聞いて、楽しんでいたようだった。そう、楽しんで  
もらい、お父さんのことを忘れてもらうのが目的だった。

無事、会食も終わり、拓也と哲哉は帰途に着き、寝た。

このまま哲哉が寝入れば、万事、うまくいくはずだった。

…が、12時頃、哲哉は起きた。

拓也もそれにつられて起きる。

トイレか？ と思いながらも、

『どうした？』



と聞く。

哲哉は、

『お父さんは？』

と答としては不適切な、しかし、シンプルでわかりやすい返事をする。

拓也は今頃、しまった、と思う。クリスマスさえ過ぎれば、父さんが来たという手紙とプレゼントでも置けば、後は理由は何とでもつけられる。だが、哲哉の起きたこの日と、時間が悪かった。

哲哉は電気をつけ、きよろきよろしながらもう一度聞く。

『お父さんは？』

拓也は

万事休すか。

と思い、サンタクロースが来ないということを言おうとした。弟の悲しむ姿は見たくないが仕方ない、と。その時だった。障子が開かれ、なんと、五人くらいのサンタの軍団が入って来た。そして、

『メリークリスマス！』

とその軍団は言った。

拓也は呆氣にとられていたが、声に聞き覚えがあった。

た。ぶ。友好会の…。

哲哉は先頭の（恐らくはあのアホであろう）サンタに、お父さんは？と聞く。

そのサンタは驚くことを言い放つ。

『私がお父さんだよ。』

そのサンタは拓也にウィンクした。

んじゃあ何か、俺はあんたの息子か！

と怒りを覚えつつも弟の為にしてくれたことだ、と怒りを治める。

哲哉は

『しょーこは？』

と聞く。

そのサンタは玩具の警棒と手錠を差し出した。

『お父さんね、警察やめて、サンタクロースになったんだ。だから、とっても忙しい。哲哉がいい子でいたら、来年も来るよ。』

哲哉は幼さからそのサンタを信じた。

『お父さん！』

そして抱き着いた。

しばらくして、哲哉が

『来年も来てね、きつとだよ。』

と言い、その後、サンタ達は去って行った。残ったものは玩具の警棒と手錠だけ。そして、哲哉はその二つを持って、拓也に

『兄ちゃん、僕、将来、これで、警察官になる。そしてその後にサンタクロースになってお父さんの手伝いをするんだ。』

と言った。

拓也は

警察官が出世するとサンタになるわけじゃないが…

と思ったが、弟が喜んでいたので、しばらく弟の話に付き合って、その後寝た。

次の日、お礼をしようと、部のメンバーに連絡するが、全員にしらをきられた。

拓也は最後に思った。

お前らこそが、俺にとって、本当のサンタクロースだったよ。と。

たぶ友好会　拓也と哲哉のクリスマス・完

（後書き）

なんとか間に合いました。 え？連載の方も早く手直ししろ？  
……がんばります！！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3001d/>

---

たぷ友好会～拓也と哲哉のクリスマス

2010年10月15日23時24分発行